

一

次の各問いに答えなさい。

問一 次の各文の―線部のカタカナを漢字に、漢字をひらがなに直しなさい

- 1 技術がシンボする。
- 2 世界記録をジュリツする。
- 3 町のジンコウが増える。
- 4 名前のユライを調べる。
- 5 余計な手間を省く。
- 6 正しい作法を身につける。
- 7 底力を見せつける。
- 8 今後の予測がつかない。

問二 次の四字熟語の空欄に入る漢字をあとのア～クから一つ選んで、それぞれ記号で答えなさい。

- 1 有名無
- 2 意気合
- 3 想天外
- 4 言語断
- 5 品行方

- ア 道
- イ 奇
- ウ 理
- エ 実
- オ 正
- カ 当
- キ 同
- ク 投

二

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

学生に聞いてみる。

「水を入れたコップのなかに、インクを一滴、落とす。インクはまもなく薄くなつて、消えてしまう。それはなぜか」

学生からは、返事がない。ただ **I** するばかり。返事を強要すると、こんな答が返ってくる。

「そういうものだと思っていました」

ここである。科学かどうか、この態度が分かれ目になる。

世の中とはそういうものだ。それが「そういうものだと思ってました」のハイケイ^①にある考えである。世の中とはつまり人が作った世界である。そこにはいろいろな約束ごとがある。約束ごととは、ほかにもいろいろやり方はあるかもしれないが、とりあえずそういうこととしておこうと、人間が決めたことをいう。人間がいわば勝手にそう決めたのだから、その世界のくせがついてしまうと、たいていのことは「そういうものだと思ってました」で済ませることになってしまう。

朝、知り合いに出会ったら、「おはようございます」という。夜なら「こんばんは」である。なぜそういうのか。理由ははっきりしない。「そういうもの」なのである。でもべつに「おはようございます」といわなくてもいい。アメリカなら「グッドモーニング」だし、ドイツなら「グーテントーク」である。北海道なら、「こんばんは」とはいわないで、「おばんです」という。

私たちは魚をサカナと呼ぶ。なぜサカナであつて、カサナとかナカサとかサナカではないのか。日本語では、魚はサカナと呼ぶことになっているからである。ことばというのは「とりあえずそう決めておく」「そういうことになっている」というお話が、典型的に通用する世界なのである。私たちは年中ことばを使っている。だからことばの（ X ）はすぐついてしまう。魚がサカナと呼ばれることについては、明瞭な理由はない。現に英語では、サカナではなく、フィッシュという。

ところが、科学が相手にするのは、世間の約束ごとではない。自然である。その自然とは、人間が作ったものではないものを指す。人間の作ったものではない世界には、「そういうことになってます」という約束ごとはない。水の中にインクを一滴落とすと、しだいに拡散して、やがて消えてしまう。消えないで、インクの一滴のまま、いつまでも残つたついでいいじゃないか。でも、実際にインクを落としてみると、どうしても消えてしまう。じゃあ、それはなぜか。

自然に対してなら、そういう質問は、いくらしてもいい。ただし、たとえばこのインクの話をきちんと説明するのは、イガイ^②にむずか

しい。親に聞いても、わからないというかもしれない。あるいはこの忙(いそ)しいのに、変なことを聞くな、と叱(しか)られるかもしれない。でもこのインクの話は、じつは科学で説明できるのである。

「おはようございます」に対して、「なぜおはようか」という質問をすると叱られる。「そういうことになってる」と怒(おこ)られるのである。それは人の世のきまりだからである。理由はともあれ、そういうことになっているのである。科学を勉強するなら、世の中のきまりであるものと、自然のものと、その区別をまずしなければならぬ。

私が子どもだった頃(ころ)も、科学的に考えなさい、などとよくいわれた。科学とは、身の回りの簡単なことに疑問を持つところからハジマる。そんなふうになに書いてあった。先生もそんなふうなことをいう。でも「身の回りの簡単なこと」についての疑問といっても、ここまで述べた例のように、いろいろある。身の回りに起こるさまざまなきごとのなかで、自然のできごとを扱(あつか)うものを自然科学というところがある。自然のできごとについて、「そういうものだ」と思ってしまうと、

II

疑問なんかわからない。

科学のはじまりになるような「簡単な疑問」が、なぜふつうは頭に浮(う)かばないのか。じつは世の中を楽に生きていくには、世の中のきまりを「そういうものだ」と早く思ってしまったほうが得だからである。だからインクの話も、「そういうものだと思ってきました」という答になる。

野球はなぜ一壘(いっしゅう)から回っていくのか。三壘から回ったら、なぜいけないのか。そんなことを考えていると、野球は上手にならない。野球は一壘から行くことに「なっている」のである。なにごとであれ、「そういうことになっている」と早く思ったほうが、世の中では生きやすい。だから世の中を上手に生きようと思えば、科学的な態度はとらない方がいい。そういうことになる。世の中とは「人間が作ったもの」で、それなら「自然ではない」からである。

ふつうの人は、「簡単な疑問」を追求するより、「世の中を楽に生きた方がいい」と思っている。だから「そういうことになっている」という。でも楽に生きると、面白く生きるとは違(ちが)う。私は楽(え)に生きるより、面白く生きた方がいい。だから科学をやる。だからコップの水の中で、インクがなぜ消えるか、それを疑問に思うのである。

(養老猛「理科とは何か」より)

問二 空欄 **I**、**II** にあてはまる言葉として適切なものを、あとの**A**～**E**からそれぞれ一つずつ選んで記号で答えなさい。

I **A** イライラ **イ** ハラハラ **ウ** モジモジ **エ** ドキドキ

II **A** そもそも **イ** ゆめゆめ **ウ** とぎとぎ **エ** どんどん

問三 空欄（**X**）には、本文中で使われている語句が入る。その語句は何か、五字でぬき出して答えなさい。

問四 — 線**A** 「いろいろな約束ごと」とあるが、「約束ごと」にあてはまらないものを、あとの**A**～**オ**から一つ選んで記号で答えなさい。

A 私たちが犬を「犬」とよび、「猫」とは呼ばないこと。

イ 水の中では火は燃えないこと。

ウ じゃんけんでは、グーがパーに負けること。

エ サッカーでは、手でボールに触れてはいけないこと。

オ 振り子が一往復する時間は振り子の長さによって決まること。

問五 — 線**B** 「人間が決めたこと」とあるが、同じ意味の語句を本文中より五字でぬき出しなさい。

問六 — 線**C** 「自然に対してなら、そういう質問は、いくらしてもいい」とあるが、それはなぜか。その理由を本文中の表現を用いて答えなさい。

問七 — 線**D** 「れる」と同じはたらきものを、あとの**A**～**E**から一つ選んで記号で答えなさい。

A ピーマンは嫌いだだが、炒め物にすると食べられる。

イ 校長先生が前に立って話される。

ウ 教室そうじをいつもより丁寧にしたので、先生にほめられる。

エ この曲をきくと、昔のことが思い出される。

問八

——線E「楽に生きるより、面白く生きた方がいい」とあるが、筆者にとって(1)「楽に生きる」、(2)「面白く生きる」とはどのような生き方をいうか、それぞれ次の二つのことばを使って説明しなさい。

科学的な態度 ・ 「簡単な疑問」

三

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。設問の都合により本文を改変したところがある。

それは I 閃光^{せんこう}だった。

曲名と学校名を紹介するアナウンスが会場に入った。指揮台わきに滑り込むようにたどりついた森勉が、実に素早く息を整えた。アナウンスが終わると同時に、ベンちゃんの息をきらしていた肩は、静かになった。指揮台上がった時には、数秒前まですばしっこく走り回っていたのがうそのようだ。有木と目が合う。指揮棒が振り上げられた。高く澄んだクラリネットの音が観客をしつかりつかまえた。ティンパニが鳴り響く。

「交響的譚詩」^{こうきやうてきだんし}は無難^{むなん}にこなした。祥子がマリンバの位置に移動する。 II 数秒のことだ。会場は水を打ったようだ。再び指揮棒が振り上げられた。

ティンパニが静かに打ち鳴らされ、チューバなどの低音グループが最初の主題を奏ではじめた。克久は真っ直ぐに立っている。立っているけれども、既に身体は音楽の中に吸い取られていた。何か、大きなものに包まれる感覚だった。

そこにあるものは、目に見えるものではなかった。が、克久は全身で、そこに確かにある偉大なものに参与していた。入るとか加わるとか、そういう平たい言葉では言い表せない敬虔^{けいけん}なものであった。感情というようになちつぽけなものではなくて、人間の知恵^{ちえ}そのものの中に、自分が存在させられていた。それが参与ということだ。

低音グループが奏でた主題に木管が加わり、音の厚みが増す。やがてティンパニがクレシェンドで響いた。それを木管楽器たちが優しく清らかな歌で迎えた時には、克久の胸の中にあの大きな夕陽があかあかと燃えた。いつも、そこで大きな夕陽が現れる。もちろん、克久はただ音楽に酔っていたわけではない。指揮棒はたえず、音が加わるべき位置の指示を出していたし、拍は正確に数えられていた。部員^Aだけに解る伝令^{でんれい}が走り回っていた。それでも、あかあかとした夕陽は決して克久の目の中から消えなかった。夕陽の周囲に見慣れた団地の眺め^{ながめ}があり、それが斜めに射す陽の光を受けて、尊いものとして輝きを帯びた。克久は音の中にそういうものを見ていた。

曲は長い尾を引いた孔雀の優美な歩みや、青く光る首の動きを表しながら進んでいく。克久はホルンがタタタタン、タタタタンと、草原に吹く風の音を奏でる間に、トライアングルをかまえた。ベンちゃんの眉毛が今だと告げる。克久が打ち鳴らすトライアングルの涼やかな音を聞き逃してしまふ聴衆^{ちゆうしゆ}もいることだろう。しかし、それは決して欠くことができない重要なディテールだ。

B 一つの重要な仕事を終えた彼は、おごそかな足取りで大太鼓の前に進んで行く。まったく彼の足取りはおごそかといかない

ものだ。たとえ、その足が三カ月以上一度も洗ったことのない上履きをはいていたとしても、重要な儀礼ぎれいに参加する司祭のおごそかさや邪魔じやまするものではなかった。

曲はクライマックスをめざし、正確に進行していた。少しも間違いがないとは言えない。小さなミスは、それぞれにすり傷、切り傷きりきずとなつてしみ込んでいたが、痛みを訴うったえる暇ひまはなかった。今、ここだという指示が指揮棒の先から飛んだその瞬間しゆんかんに、克久は大太鼓を一発、十分に抑制よくせいして打ち込んだ。もう一発、重要な部分がある。その指示は指揮棒からはこない。ベンちゃんべんちゃんの眉毛がここぞとその打ち込むべき位置を教えた。克久の一発に続いて、マアさんがシンバルを華やかに響かせた。孔雀がその羽を震ふるわせながら開く時の光そのものが、マアさんのシンバルの音だった。すかさず金管が高らかに孔雀の羽の輝きを繰くり広げる。

金管が華やかに孔雀の大きく広げられた羽そのものを表現した中へ、あの夕暮れの風のようなホルンが通り過ぎていき、ティンパニが最後を力強く締めくくった。次の瞬間、すべての音は完全に消え失せると同時に、威勢いせいをほこつた孔雀の姿も消えた。

四十七人の部員と一人の指揮者がいる。

拍手が湧わき起こるより先に、四十七人の部員は、ただの中学生ちゆうがくせいに戻る。

克久は中学校を卒業するまでの間に何度となくこの不思議な瞬間を経験することになるが、最初に経験したのはこの時だった。

夢から覚めるというようなあいまいなものではなかった。この世界には敬虔に参与すべき何かがあることが明快に身体で解る場所がそこにあつた。そこから大事なものは隠かくされてしまっている場所へ戻つたということだ。大事なものは隠かくされてはいるが、克久はその痕跡こんせきをしつかり握にぎっていた。だから、ホールホールのロビーで久夫から「上手だな」と言われた時、妙みょうにしらけた気持ちになつた。久しぶりに見る父の顔だが、克久はあまりうれしそうな顔はできなかった。

「俺おれ、ちよつと、二発目の大太鼓の入りが遅おくれたから。まずかった」

「いや、うまいよ。上手だよ」

久夫に言われるほど、克久はしらけてしまう。そのしらけかたは地区大会で百合子に「小学生とはぜんぜん違う」と言われた時の、それどころじゃないという感じとは違つた。久夫に「うまい」と言われるほど、克久の満足した気持ちがにごつていくような感じだった。

E 「なんかさ、変だと思わない」

宗田が花の木公園前のバス停のベンチに腰こしかけたから、他の男子も立ち止まつた。

有木は小首をかしげて「何が」と宗田の話の先を催促さいそくした。

「ベンちゃんさ」

「どこも変じゃないよ。いつもと同じだ」

川島はチューバを抱かかえていた。町屋もチューバを抱えている。こんなデカイ楽器を抱えて、二人は学校から帰ったあと、また練習をしようというのだ。日は暮れかけていた。けれども、関東大会が近づいている。

「今年と言わないなと思って。あの音楽になってないって文句を」

「そう言えば聞かないな」

有木はトランペットの山村正男の顔を見た。

「県大の前には何度か言っていましたよ」

「去年の今頃いまごろなんて、毎日、五回は言っていたんだ。こんなのぜんぜん音楽になってない」

「そんなに言ったんですか」

新学期が始まってからも毎日、練習だった。帰りはいつも男子六人がかたまってる。

(中沢けい「ブラス！ ブラス！ ブラス！」より)

問一 線①～③の本文中における意味として適切なものをそれぞれあとのア～エから一つ選んで答えなさい。

① 「無難に」

ア 平穩無事な様子

イ とても難しい様子

ウ とても簡単な様子

エ 危険でひやひやする様子

② 「水を打ったよう」

ア 騒いでいる様子

イ どきどきしている様子

ウ しらけている様子

エ 静まり返っている様子

③ 「おごそかな」

ア 落ち着いて余裕のある様子

イ どっしりと威厳の有る様子

ウ さっさと急いでいる様子

エ きびきびと動いている様子

問二 空欄Ⅰ、Ⅱにあてはまる言葉として適切なものを、あとのア～エからそれぞれ一つずつ選んで記号で答えなさい。

ア ただの

イ めいめいの

ウ 一瞬の

エ ほんの

問三 次にあげる楽器の音色を、筆者は何にたとえているか、本文中よりそれぞれ漢字一字でぬき出して答えなさい。

① ホルン

② シンバル

③ 金管楽器

問四 次の演奏担当者はだれか、それぞれあとのア～エから選んで記号で答えなさい。

- ① マリンバ ② トライアングル ③ シンバル
ア 克久 イ ベンちゃん ウ 祥子 エ マアさん

問五 —線A「部員だけに解る伝令」とは何のことか、その説明として適切なものをあとのア～エから一つ選んで記号で答えなさい。

ア 演奏者同士が送りあっているメール

イ 演奏者同士が黙って目くばせで知らせている合図

ウ 指揮者が、指揮棒などで出す指示

エ 指揮者の、こっそり伝えさせた伝言

問六 —線B「一つの重要な仕事」とは a 誰が、b 何をすることか、答えなさい。

問七 —線C「すり傷、切り傷」とあるが、これは何をたとえた表現か。本文中より五字でぬき出して答えなさい。

問八 —線D「この不思議な瞬間」とはどのような瞬間か。—線Dより前の本文の表現を使って、三十字程度で説明しなさい。

問九 —線E「なんかさ、変だと思わない」とあるが、どんなことについて変だと思ったのか、その内容を具体的に答えなさい。

問題は以上です